

1848年の女性像 (4)

——Pauline Roland——

加藤 節子

§ 序

前回のジャンヌ・ドロワンと共に友愛アソシアシオン連合設立のために働き、裁判・投獄を経てきた Pauline Roland は、ジャンヌ・ドロワンよりは知名度が高い。ナポレオン三世のクーデタの折ドロワンがイギリスに亡命したのに対し、パリにとどまったポーリヌ・ロランは再び捕えられて、アフリカ送りになった。4ヵ月の流刑のあと、人々の歎願により、恩赦は得たものの帰国の船上でひどい扱いを受け病を得て、故国に着くとまもなく病死した。彼女の師であり、親友でもある Pierre Leroux が亡命先のジャージー島でこれを伝え聞き、同じ島に亡命していたヴィクトル・ユゴーに語ったのであろうか。ユゴーは Napoléon le Petit に復讐するための詩集 *les Châtiments* (懲罰) の中に (6-XI.) *Pauline Roland* (Jersey, décembre 1852) という一篇を載せている。ユゴーはポーリヌと面識はなかったと思われるが、ルルーの持っていた彼女の何通かの手紙を読んだのであろう、かなり忠実にポーリヌ・ロラン像を描いていると思われるので、やや長いがこの一篇をこの稿の序として訳出してみた。

彼女は傲慢も憎悪も知らなかった。

彼女はいつも愛に満ち、貧しく、素朴で、曇りない人だった。

しばしば、パンのない日は食事ぬきだった。

三人の子の母でありながらも、

苦しむものたちの母にもなった。

夜、深淵を穿っていく黒々とした事件も、

上げ潮も退きゆく潮も、ぽっかり口をあけた奈落も、

音もなく、巨人たちの仕事を蠶食する小人たちや、

無名の、また名の知れた悪人どもの誰一人、

彼女を脅えさすことはなかった。これら暗闇の後には、

神が築かれる未来を彼女は見ていたのだ。

彼女は彼女の信仰が絶えずますます強まるのを感じつつ、
聖なる自由の焰をかきたてていた。
彼女は子供や女性のことにも心を痛めていた。
また労働者に手を差し伸べては、こう言っていた。
ここでの生活はつらい、でもいい場所もきっとみつかります、
前進しましょう。この人にも、あの人にも運んでいった、
希望を。彼女は使徒のような人だった。
我々皆が身もだえし苦しんでいるこの地上に、
神は少しでも安らぎを与えんと、母で女性の姿の使徒をつくらせ給うたの
だ。
最も人間嫌いの人も彼女の声を好んだ。
心やさしい彼女は訪れた、貧困の屋根の下を、
飢えと苦痛が答うつ人たちすべてを、
粗末なベッドにふせている、物悲しげな病人を。
陰鬱な赤貧がものうげにのさばる屋根裏部屋を。
たまたま僅かなものを持ちあわせている時、
彼女は皆に姉のように分け与えた。
何も与えるものがない時は、心を与えていた。
静謐で偉大、彼女は輝く太陽のように愛していた。
人類は彼女にとって家族であった、
三人の子供が人類である如く。
彼女は叫んでいた、“進歩を。愛を。友愛を。”と。
苦しめる者たちに崇高な地平を開いたのだった。

ポーリヌ・ロランがこうした犯罪のすべてを犯した時、
教会の救世者や秩序の救世者が彼女を捕え、
牢獄の中においたのだ。自若として彼女は微笑む。
苦汁の海綿をこの清い口唇は好む。
五ヵ月、彼女は様々のけがれと接触する、
忘却、みにくい悪徳の笑い、獄吏、
牢格子ごしになげられる黒いパン、
しかもなお悪の身についた牢番を教化し、
女泥棒や売春婦を教える、

五ヵ月後、一人の兵隊、山賊が、
聞くも汚らわしい名をもつ者がやってきて、
——直ちに新しい支配者に服従せよ、
お前の信仰を否定せよ、さなくば許しはしない、
ランベッサ（アフリカ、ヌミディアの町）行きか、どちらか選ぶがよい。
彼女は言う、“ランベッサ”と。
翌日牢格子は軋み開く。
囚人護送車がくるのがみえる。
——ああ、ランベッサに行くのね、と怒りもせず言う。
権利のために投獄されている女性は多かった。
護送車は小さすぎた。
このひどい箱車に入りきれない
残った女たちはパリの町なかを歩かせられた、
刑囚の監視人に腕をとられて。
泥棒や殺人犯と同じように
やくざな警官たちは荒っぽい言葉を投げつける、
時に通りがかった通行人が
曳かれていく女人の群に驚き、
近づいては帽子に手をかける。
監視人は卑しい笑いを彼らに投げかける、
すると通行人は、売春婦だ！ と逃げていく。
ポーリヌ・ロランは言う、“元気をだして、皆さん！”と。
大洋が低くうなり、暗い淵が声を上げて
彼女たちを運び去った。つらい航海の間、
水平線は黒く、北風は氷のようだった。
支える友もなく、答える声もなく、
彼女たちはふるえていた。夜、甲板に雨が降り、
ねむるべきベッドもなく、嵐のなか、身を避ける場所とてない、
だがポーリヌ・ロランに言っていた、“元気をだして、皆さん”と。
荒くれた水夫たちも彼女たちをみて涙を流した。
アフリカの恐ろしい海岸に着く、
砂、赤銅の天が焼きこがす砂漠、
泉も草木もない岩山、

アフリカ、意志の強い者にとっても恐怖の地、
もはや美しき祖国のまなざしのとどかぬ
異邦の顔をもつ地、
しかしポーリヌ・ロランは やつれてた面差ながら微笑を浮かべ、
泣きじゃくる女たちに言う、“元気をだして、着きましたよ。”
しかし彼女も独りになる時は涙を流した。
遠く引きはなされた三人の子供たち、^{／＼} なんとつらい不安か、^{／＼}
ある日一人の獄吏があわれな母に言う、
——あんたは自由になって、子供たちに会いたいのだろ。
皇帝に恩赦をお願いしなさい。——ところがこの気丈な女は言う、
——私は死んだ時、彼らに会いにゆきましょう。
するとこの殉教者に、節を曲げぬ謙虚な心に、
あらゆる憎悪と残忍があびせられる、
アフリカ流刑場、^{／＼} リベロル^リが探った数々の地獄、
おお、^{／＼} 憐憫がすすり泣き、言葉もない、
一人の女性、一人の母、一個の精神よ、
ここに患い、いぢめられ、独りぼっちの彼女は流された、
粗末なベッド、寒冷、灼熱、飢え、
昼間は強烈な太陽、夜はのみ、しらみ、
監禁、休息のない労働、侮辱の数々も
彼女の魂を歪めるものは何もない、“耐えましょう”と言う、
耐えましょう、イエスのように、耐えましょう、ソクラテスのように。
捕えられて、この不毛の地にひかれてきた。
疲労と、炎熱の太陽が彼女をおしつぶしても、
徒刑囚のごと 歩かせる。
熱が彼女を蝕んだ、顔色はくすみ、青白く、やせ衰えて、
夜は腐ったわらぶとんにたおれる、
そして鎖につながれたフランスのやさしい名をつぶやく。
この女は独房の奥に投げ入れられ、
病は彼女の生命を侵していったが、彼女の魂は偉大になっていった。
彼女は重々しく繰り返す。「この隷属状態と卑劣さの中で、
一人の女が正義と自由のために死ぬのはよいことです。」
彼女が喘ぐのを見、彼らが報告するだろうことを知って、

死刑執行人たちは恐れた、恥を知らない冷血漢どもは。
 十二月の男は 彼女の流刑を短縮した。
 「彼女を帰国させよ、死ぬためだから。」
 彼女はもう自分がどうなっているのか知らなかった。
 リヨンで彼女の臨終はやってきた。
 灯りが消え、夜の帳が下りる如く、
 彼女の瞳はうすらぎ、ぼやけていく。
 墓石の影がゆっくりと彼女の青白い顔にたち上る、
 せめて母の最後の息と最後の目ざしをうけとめようと、
 彼女の息子はかけつけた。
 あわれな母よ、それはあまりに遅かった、
 彼女は死んでいた、苦しみもだえて。
 フランスと、暖かい光の美しい空を
 見ていることも知らず彼女は逝った。
 うわ言の中にも叫んでいた。“子供たち。”と。
 人々は彼女の埋葬に泣くことさえできなかった。
 彼女は地下に眠っている、さあ司祭たちよ、
 立上れ、司祭冠をいただき、教会墓地にて、
 神に向かって、あなた方のテデオムの祈りを吐きだすがよい。

§ サン＝シモン主義者ポーリヌ・ロラン

ポーリヌ・ロランの生涯の前半は *Enfantin* 文庫にのこされた書簡、アンファンタンの幼な友達で最後まで彼に忠実であった助言者サン＝シモニエヌの *Aglaé Saint-Hilaire* や *Louis Lambert* など彼女が導師と考えていた人との50通以上の文通や、長年生活を共にしていた *Jean Aicard* との間の書簡によって緻密な研究をされた *M. Thibert* 女史の論文 *Une apôtre socialiste de 1848, Pauline Roland* や、またその後 *E. Thomas* の更に新しい資料の発掘によって書かれた *Pauline Roland, socialisme et féminisme au XIX^e siècle* などのすぐれた著作から多くのものを借りつつその伝記の概略を紹介しよう。

ジャンヌ・ドロワンと同じく彼女もサン＝シモン主義を経てきた。ドロワンが冷静で批判精神に富んだ対応をし、主体的に女性解放運動を行ない、サン＝シモン集団はこれに理論的骨組を与えてくれる便宜的手段であったのに対し、

ポーリヌ・ロランは熱情的な魂の持主で、文字どおり心身ともサン＝シモン宗教に捧げつくした感がある。

Marie, Désirée, Pauline Roland は1805年6月7日に Falaise に生まれた。妹の Irma が翌年生まれたが、まもなく父親は亡くなった。父はファレーズの郵便局長をしていたので、母がその職を継いだ。ポーリヌは寡婦の母と妹 Irma の三人家族で、「鉛のように重い」村に住んでいた。やがて村の教師 Desprez によって妹と共にサン＝シモン主義の手ほどきを受ける。その後パリの Aglaé に紹介されたらしく、彼女との間に多くの文通がなされた。1831年11月に Pauline Chevalier (Globe 紙を編集していた Michel Chevalier の妻であろう) 宛にカトリックから改宗する旨の書簡がある。しかし、ファレーズの田舎ではサン＝シモン主義者といえば、いかがわしい山師と考えられているので、母は娘たちを托した教師 Desprez によってその宗教に染まったことに大いに腹をたて、Desprez との交際を禁じた。ポーリヌは妻子ある教師との間に始ったプラトニックな恋をあきらめ、1832年11月には生活のためもあって上京する。27歳である。自信のある英語とイタリア語をサン＝シモン主義の普及に使う仕事を探してほしいという書簡もある。しかしこの時期はサン＝シモン家族が解体しはじめた時であった。

1831年11月の総会ですでに多くの離脱者がでていた。サン＝シモン主義の女性解放論は前回に概説したが、ここでもう一度必要な部分を再述する。

サン＝シモンが語ったという「社会的個人、それは一対の男性と女性である」という言葉をもとにサン＝シモン主義の女性解放論は始まる。この言葉に関する教義の発展の段階で、最初のサン＝シモン主義集団の枢機卿会 Collège のメンバー Orlande Rodrigue, Infantin, Bazard, Laurent, Eugenie Margerin, Buchez は何ヵ月かの議論の末、敬虔なカトリック信者であった Buchez が1830年1月4日に離脱していった。一方、枢機卿会は Infantin と Bazard を最高教父に選んでいっそう位階制度を確立し、宗教色を強めていく。女性の地位の低さ、未成年としてしか扱かわれずにいる女性の解放、同様に奴隷の重みにひしがれているプロレタリア解放の必要性はバザールもまた同意してきた。現在の世の中は無秩序で戦いの世であり、これを和解と調和の世にするために女性を呼ばねばならないとアンファンタンは11月の総会で述べている。しかしその実際の方法についてはバザールはアンファンタンのラディカルさについてゆけない。

11月19日の総会でアンファンタンはバザール離脱の報告をし彼の女性解放論を展開する。

キリスト教は女性を政治や教会から閉め出し、男性への従属を強いてきた。キリスト教の精神主義は物質を呪い、肉体を卑しいものとして排斥してきた。そして肉体と精神を戦いの状態においてきたが、未来の法はこれを調和させねばならない。人間の労働の成果である物質の享有という「物質の復権」論から各人の肉体的、知的、感情的満足の権利を主張する。そして人を二類別し、深い心を持ち、“変らぬ心”の人と、活発な心をもつ“移り気”の人に分け、後者の権利、即ち次々とよりよい相手を求めていく前進的結合をも認めるべきだという。こうした性格の違いを調和させるべく、最も愛のある、この両方の性格を理解できる男女司祭という発想がでてくる。この男女一対の司祭の *loi vivante* 「生きた法」によって夫婦の関係を調和させたり、どのようにかは明確には語られていないが、その関係に介入するという。おそらく後のポーリヌの決意からみても、肉体的にも精神的にも介入するという意味らしい。アンファンタンの話は非常に曖昧で漠然としており、もってまわった言い方をしているのでわかりにくい。“変らぬ心”の人と“移り気”気質の分類をオセロとドン・ジュアンと関連づけたり、更には学者と産業家、知性の人と肉体の人と関連づけたりして、非常に安易で幼稚な類別を展開している。こうした類推や分類はおそらくフーリエの諸情念の分類に影響されたのであろうし、また後にルルーも人間を感情の人、感覚の人、知識の人という三分類にするなど、この時代のユートピストのある種の共通性と考えられよう。

この総会の場で *Leroux* や *Carnot*, *Cecile Fournel* など多くの人々がはっきりとアンファンタンの考え方に拒否の態度を示した。*Lechevalier* はアンファンタンを必ずしも非難はしないが、自分はずぐにはついて行けないと苦衷を表明する。*Transon* は教父に自分たちの生活や行動の内面まで告白した人々の許しもなく、この告白を利用して使ったアンファンタン個人の信用を問題にしている。これに対してアンファンタンは、この告白を赤裸々な心を知ることによって新しい道徳法をつくるために用いるのだと答えている。しかしこの新しい道徳法を教父アンファンタンは仮のものとして提案するのだという。これを決めるのはアンファンタンと対をなすはずの最高教母であるべきである。

こうした大荒れの総会の二日後、11月21日に再び総会が開かれた。*Cazeaux*, *Fournel*, *Charton*, *Gueroult* らが再び抗議をし、この分裂は短期間で元にもどることを希望しつつ、後髪をひかれる思いで離脱する。残った支持者たち

に、アンファンタンは女性を男性と平等の状態にする前に、女性は自由をもたなくてはならないから女性の位階をはずすと語る。サン＝シモン社会はきびしい階級制になっていて²⁾、最も有能なものとして選ばれた人が最高教父(Pape)となり(1831年11月11日に二人の最高教父のうちバザールは離脱したのでアンファンタン一人となる)、その下に最高教父によって任命された枢機卿会のメンバーがサン＝シモン教会の執行部として協力する。これは第二階級(second degré)であって、彼らは Père や Mère の称号をもっている。

第三階級(troisième degré)のメンバーは、その下の一般信者とは区別されているが、Père とか Mère とは呼ばれない。この時点で枢機卿会に属していた女性は Claire Bazard と Cecile Fournel のようである。

また今後の女性への呼びかけ Appel aux Femmes の仕事は男性の使徒活動となる。アンファンタンの傍に椅子がおかれ、最高教母への呼びかけのシンボルとなる。男性の位階もこの仕事に適したように再編される。ロドリグが経済的責任者となって、傾いてきたサン＝シモン家族の経済的立て直しをまかさね、また労働者の宗教的アソシアシオンの組織長に任命される。

自由を得た女性たちは、さまざまな行動をおこす。最高教母の地位をめぐって女サン＝シモニアンの中に烈しい戦いもあったようである。サンドにアンファンタンが教母になってくれるよう手紙を書いたという説もあるが、その手紙は見出せない。しかし Vinçard³⁾によると Pol Justus の発案で1月1日にサンドにサン＝シモン家族のそれぞれが考えたものをプレゼントしようとした。サンドに Mère になってもらいたいという希望があったわけである。しかしサンドは非常に巧みな辞退の手紙を書いている。

またジャンヌ・ダルクばりに、片田舎から彗星の如く名のりをあげた少女もいた。

Cecile Fournel や Claire Bazard はアンファンタンから遠ざかり、Aglæeのみが彼の思想の支持者として忠実にとどまっているわけだが(彼女は最初から位階に入っていない)、彼女は性格的に嫉妬深く、狭量の女性のように M. Thibert も E. Thomas も書いている。アグラエは当然この地位に食指をうごかしている。彼女にはあらゆる女性がそれを篡奪しようとしているように見える。ポーリヌが上京してきたのは教父の分裂の一年後で、サン＝シモン主義が女性解放のための教母を待っている時期であった。ポーリヌは上京してもアグラエは彼女の情熱的性格に恐れをなしてか、なかなかアンファンタンに会わせようとしなかった。ポーリヌはすべてを赤裸々にアグラエに告白し、全幅の信

頼をよせているのに対し、残されたアグラの書簡はポーリヌのことを冷やかにアンファンタンに伝えている。

さてサン＝シモン宗教に集っていた女工たちはかなり奔放に行動して、クレール・バザールやセシル・フルネル、アグラエ・サンチレールなど教義の奥方 (*dames de la doctrine*) たちにもともとあまり従順でなかったようである。その女工たちのうちの Désirée Veret (Gay) と Marie Reine が *Femme Libre* (自由女性) という雑誌を創刊した。アグラエはこの雑誌を非難したが、アンファンタンにたしなめられている。事実、この小雑誌はアンファンタンの説教に呼応するものであった。「これは女性のアソシアシオンと自由のための伝道の仕事である」と創刊号に書かれている。女性は今まで何か偉大なことに身を投ずることのできる組織がなかった。そして孤独の中で些細な個人的なことに携わることしかできなかった。それでこの機関誌をあらゆる意見の女性の出会いの場、自由な論壇にしようとした。こうした女工による女性の意見交換の場の創出、女性のアイデンティティの模索という運動は女性史上にも特筆すべき事件というべきであろう。アンファンタンの提案に関しては、編集者たちは新しい法が作られるまではキリスト教道徳に従うが、本能に従って自由に振舞う女性も肉体の復権を實踐する女性としてまた歓迎すると述べている。

ポーリヌはプチブルのインテリに属するが、この女工たちの *groupe de prolétaires* に心よく迎えられたようである。Mérimée の作品の書評, *Un mot sur Byron, Ahasverus de E. Quinet* など Pauline と署名されたものは彼女のものと考えられる⁴⁾。

雑誌の題名は *Femme Libre* から *Apostrat des Femmes, Femmes Nouvelles Affranchissement des Femmes, Tribune des Femmes*, など気儘に変えているし、編集者も Suzanne Voilquin と Angélique や Célestine と入れ代っているが、30号以上続いている。

Thibert 女史はポーリヌを悪い意味を含めない「信心家」と規定している。敬虔なカトリックから改宗するが、最初アンファンタン理論をアグラエから聞いた時、嫌悪感を抑えきれなかった。そして妻子ある教師 Desprez との恋にそれを援用し、自分の利益のために用いることは彼女の潔癖が許さなかった。むしろ彼女は離脱者 Bazard と共に歩んだ方が楽であった筈である。バザールは1832年1月に *Discussions Morales Politiques et Religieuses, qui ont amené la séparation qui s'est effectuée au mois de novembre 1831 dans le sein de la société saint-simoniennne.* と題する小冊子を著わして自分の立

場の弁護とアンファンタンの批判をしている。「第一部、男女の関係、結婚、離婚」に彼は女性解放論には同じく賛成であるが、キリスト教批判をアンファンタンとは共にしない。アンファンタンの批判する点をバザールはキリスト教の実践の不十分さによるものとする。キリスト教はそれ以前の野蛮な時代から女性を解放したという見方に立つ。総会でアンファンタンの述べた説は非常に曖昧な言い方になっているが、それ以前はもっと淫らな、教父に領主権的なものをも与えることも考えていたと暴露する。

しかしポーリヌはバザールは魂の指導者ではないと言う。Claire Bazardに宛てた手紙⁵⁾に「私は心の底からバザール教父が正しいと思いたい。しかし私は自分を納得させられない。アンファンタンの進む道を嘆きながらも、彼のうちに、また彼に従う人々のうちに、この鉄の意志、この強力な磁力、創立者の特性たる深い愛を認めるのです。バザール教父はこの熱情が足りないと思えます。彼は宗教者というより哲学者です。彼は確信の人で、彼の教義は非常に節度があり、すべての人に採用されうるものです。しかし彼には人をひきこむ情熱や人を従わせる大胆さがありません。要するに奥様、私は何の制限もなくバザール教父の道德教義を受入れ、今日私はアンファンタン教父の教義を遺憾に思いますが、私が信仰をもつのは後者であって、前者ではないのです。」と書かれている。こうしてアンファンタンのカリスマ性に魅せられたかのように、「実際この人は神の息子です」とまで書くポーリヌは、合理的なものからますます情緒的なものになっていくサン＝シモン宗教にひかれていく。こうして我々はポーリヌが「サン＝シモン教母」の如く、アンファンタンの説くサン＝シモン司祭による信者の精神的・肉体的救済を実践するのを見るのである。

主なサン＝シモニアンが教母を探しにエジプトに向かった時、彼女自身もそれに続こうとした。Suzanne Voilquin, Cecile Fournel, Clorinde Rogéら多くの女性もまたこのファンタスティックな旅に出発したのである。しかし費用をつくるには三ヶ月も待たねばならない。Lambert 導師がこの時パリに残る若者たちの面倒を彼女にまかせた。彼は特に Adolphe Gueroult——Globe 紙や Temps 紙に執筆していた才気ある青年であるが、放浪癖があり、心がゆらめいてフリーエ主義にひかれていた悩める青年であった——を彼女に託した。彼女は自分の信じた教義を完全に生きようと決意した、アンファンタンの教義に沿って生き、それを実践しようと決意した。他のサン＝シモン派女性には単なる「情事」であったのがポーリヌにあっては道德的で論理的な予定された行動であった⁶⁾。しかし彼女は実践の前に彼女の行為が引起こすであろう齟齬、非

難に耐え、苦しい立場に敢然と立ち向かわねばならないことを覚悟した。1833年11月アグラエに宛てた手紙⁷⁾には、この心の戦いが書かれている。「私はあなたにお話ししたいと長らく思っていました。あなたの胸中から力を汲み取りたいと思ってきました。しかしそうすべきでないといなる声が言っていました。一人でこの恐るべき不安から抜けださねばなりません。誰も私を引込まなかったという保証が必要だったのです。孤独の中で、少なくとも先輩の不在の中で神の声を聞くべきだと思ったのです。」ひそかな不安との戦い、意志を鈍らせようとするものとの痛ましい戦いに、「一人で自分の人生を耐えていくことに疲れ、誰かが私の道をさし示してくれることを願うほどでした。」こうした数ヶ月の宗教的冥想のあと、彼女が自ら呼ばれていると信ずる司祭職を実践しようとする。そしてその行為の後おこりうる結果の重みを一人で背負う意志を公表し、できるであろう子供は一人で育てると宣言する。

Gueroult との関係は二人がそれぞれに Lambert に心の状態を書き送っている書簡があり、ゲルーはポーリヌに対して感謝とやさしさをこめて、自分が再生したのは彼女のおかげであると述べている。ゲルーとの間には一男をもうけるが、その後彼女は Jean Aicard という青年に第二の救済を実践した。エカールは当時枢機卿会に属し、「女性の友」(Compagnons de la femme) というグループをつくっていた Barrault と喧嘩わかれをした離脱者であった。彼との間にも何人かの子供が生まれ、1847年頃までの十年以上にわたる関係が続いている。

アグラエは次のような手紙をエジプトのアンファンタンに書き、「燃えさかる火に飛びこむこれらの女性たち」のことを嘆いている。

「ポーリヌといえば、Génevoix (Gueroult のことか?) の留守中に彼の友達の一人を愛しはじめました。私には彼がマルセイユに出発する時に彼女を遺贈していったのでないかと思えます。ところが彼が戻ってきました。ポーリヌの与えたお金を使い果たして。私は彼女がどちらのものなのか知りません。何故なら彼らは共有することは望みませんし、彼らの一人と同棲しながら偶然に第三の男を救うだろうことをよく理解しています。」

エジプトから戻ってきたセシル・フルネルは、女性たちの風俗の乱れに嫌悪の情をあらわす。「この気狂いじみた行為は今風と彼女たちは主張していますが、社会の悪徳の真似にすぎません(Lettre à Lemonnier)」。そしてアグラエに宛てた手紙には「ポーリヌについて私の知ったことは、私にはとてもつらいことでした。彼女に対しても、また彼女が解放のために働いていると信じてい

るけれど、実際は鎖をきつくする手助けをしているこれらあわれな女性たちのためにも。ああ神様、これは私が夢みてきた未来ではありません。私は不完全ではあるけれど、このいわゆる新しい世界よりは嘔気をもよおさない旧世界に戻ります。それにこの今様の世界は実際は社会の悪徳の写し、その最も暗い側でしかありません。……」⁸⁾

一方ポーリヌは十年後に Aicard に新しい恋人ができて、彼との別離はつらいものとなっていたようである。この二人の波瀾に富んだ「サン＝シモン小説」は省略することにする。ポーリヌは三人の子供を極貧の中、独りで育てなければならなかった。

彼女の結婚観はそのつらい経験のあと次のように変っている。Lefrançais 宛の手紙に「Jean (Gueroult の息子) の父と結婚した日、私たちは致命的な教義にひたっていました。それが Jean を父なし子にしてしまったのです。」(1851年3月28日)「今私は若さの誤ちの重い贖罪をしています。」と子供に出生の秘密を話さねばならない苦衷を語っている。「母親のみが家族であるという奇妙な理論から出発した私は、今その誤ちをみとめます。……しかし子供たちのことを全く気にしない男たちの心がわからない……。」(1851年6月9日)

§ 人類教とブサック協同体

Pierre Leroux や Jean Reynaud を知ったのは、おそらく Jean Aicard を通してであろう。彼らの発行している *Encyclopédie Nouvelle* (新百科辞典) に Aicard が執筆しているし、ポーリヌ・ロランも第二巻(1836)と第三巻(1838)にいくつかの項目を執筆している。ルルーとレイノーはサン＝シモン主義と袂別してから、*Revue Encyclopédique* を発行し、その後ディドロ、ダランベール以来「進んだ知識を一般化し、共通のものにできるよう」という十八世紀の百科辞典を更新する意図をもった「新百科辞典」、副題「文学者、学者のグループによる十九世紀の人間知識の見取図を提供するための哲学的、科学的、文学的、産業的辞典」を発刊している。執筆者は彼らの他に、E. Peireire, Transon, Carnot といった元サン＝シモン主義者や Théodore Lacordaire, Geffroy Saint-Hilaire, Dumont d'Urville, le Play などがいる。ポーリヌの執筆した部分は地理、歴史に関するもので、第二巻では, Asie, Asie-Mineur, Attique, Aunis, Autun, Auvergne, Azerbijan, Bajandes, Bassompierre, Béarn, Belesme et Alençon, Berlin, Berny, Birmingham, Blois, Bordeaux. 第三巻では Bouillon (Maison de) Bourbonnais, Bresse, Bretagne, Castille,

Catalogne, Champagne で、当然のことながら、無色透明な記述となっている。Asie では日本、朝鮮に関しても多少言及している。

Revue Indépendante はルルーとサンドによって1841年に創刊され、執筆陣も Lamennais, Carnot, Schœlcher, Lamartine, Louis Blanc など進歩派の人々で48年に一躍表舞台にでる人々であるが、なんとといってもサンドがこれに *Horace, Comtesse de Rudolstadt, Consuelot* などを連載して声価をたかめた。この *Revue Indépendante* にもポーリヌは七篇のかなり長篇の論文を載せている。Travail des femmes et des enfants dans les mines (1842, juillet), John Philpot Curran, orateur Irlandais (1846, oct), James Makintosh (1844, août), Thomas Morus (1846, août), Georges Canning, poète et homme d'Etat (1846, mars), Etudes sur l'histoire des femmes en France (1846, juillet, 1847, jan.) である。

「フランス女性史の一考察」は前半にガリヤ時代から蛮族侵入までの女性について様々の考察があり、後半は女子修道院についての論説となっている。修道院はカトリシズムの最も高められた表現であると讃えられた後、十八世紀には哲学者たちの攻撃の的となってきた。しかしポーリヌは女子修道院の歴史を簡略に辿り、過去における存在理由を認めている。この制度は人間の魂の不滅の要求に答えるものであり、修道院規則を注意深く研究すれば、社会再組織の貴重な萌芽をその時代おくれになった形態の中にもっていると述べている。禁欲主義は魂のもっとも内奥の深い感情の中に源をもっているし、宗教はすべて隠修士をもっていると述べる時、ポーリヌの心情の反映をみるようであり、やがて彼女が生きるアソシアシオンの原型を修道院に見出したのではないかと興味深い。しかし彼女はフェミニストの歴史には全く関心がなかったようだ。

「フランス史」の他に「イギリス・スコットランド・アイルランド史提要」、「英国史」などの著書があることから、彼女がイギリスについて深い知識をもっていることがわかるが、*Revue Inpépendante* でも何人かのイギリス人をとりあげている。

Makintosh はインドのボンベイ裁判所を再編した裁判官で、死刑を宣したのは原住民を殺したイギリス兵士一人のみで、貧しいまま帰国した、人間的魅力のある人物として描いている。Curran はアイルランドの自由のため戦った人物、Canning は黒人解放のために働いた人物で、彼女の伝記は第一級の有名人でなくとも、人類の大義のために誠実に生きた人物をかなりの筆力で描いている。Thomus Morus は十六世紀にユートピアを書き、国王の不興、身の

破滅を知りつつも、最後まで節をまげず、人間的に生きた人物として、ポーリヌのその後の生涯に大きな影響を与えたと思われる。こうした人物の選択やその一貫した語り口に彼女の知識のレベルがかなり高いものであったと考えさせられる。

更に後の労働運動と関連する「炭鉱における女子と子供の労働」と題する論説がある。「未成年者の労働を規制する法が二年前にできたが、これはまさに空気と太陽と自由を最も必要とする8～12歳の子供に、不健康で苛酷な仕事に8～12時間も就労させる法にすぎない」と述べる。この法に違反した傭主はわずか15フランの罰金ですむからである。そしてプロレタリア化の最も進んだイギリスのひどい状況を伝えるフロラ・トリスタンの『ロンドン散策』を紹介し、更にイギリス議会による子供の労働状態の調査について言及する。イギリスの炭鉱で働く労働者は文字どおり奴隷であり、人は牛馬の如く四つんばいになって車をひき、見張役の子供のちょっとした不注意から何人もの命を失わせた事件についても論述している。彼女の労働問題についての関心がここで始めて表現されたわけである。

Revue Indépendante と並んでルルーが理論を形成していった雑誌 *Revue Sociale* (1845・10～1848・1) にもポーリヌ・ロランは寄稿している。*Paysans* (juillet. sep. déc. 1846, fév. 1847), *Buzançais* (mai. 1847), *Lettre à un ami sur l'Egalité* (juin—juillet. 1847) が M^{me}X の名で発表されたものを M. Thibert はポーリヌ・ロランのものとし、E. Thomas は彼女が匿名で発表する理由が不明であるとして疑問視している。*De l'esprit de paix et de fraternité humaine* (nov. déc. 1847, jan. 1848) は Pauline Roland の署名があるからだ。きめ手となる資料もないので、前三題に言及することをさけるが、最後のものについては副題が、「国歌と民衆の歌」となっている。国歌と民衆の歌は似ているようで異なる。国歌は異なった国民や民族の対立の感情を表現することがしばしばあるのに対し、民衆の歌は一般的な人間の思想を反映し、国民的な思想ではない。フランス革命は真の民衆の歌を生んだ。それは戦争の歌ではあるが社会戦争の歌で、不毛な土地の征服ではなく、自由平等友愛の三つの言葉の聖なる征服に権利を与えたからであると述べている。後にエンゲルスの「プロレタリアの大多数はもともと国民的偏見をもたないし、彼らの教養と運動の全体は本質的にいって人道的で反国民的であり……」云々の言葉を思わせる文章である。

Encyclopédie Nouvelle, *Revue Indépendante*, *Revue Sociale* とルルーの

仕事に協力しているポーリヌ・ロランはサン＝シモン宗教を捨てたわけではないにしても、ルルーの *Religion de l'Humanité* (人類教) に深く心酔していたと思われる。Aicard と別れた後極度の貧困におちいり、ルルーが1844年に創設した Boussac の *Communauté* (協同体) に参加したのは1847年4月以降のことと考えられる。

ジョルジュ・サンドがルルーの思想から多くの小説、*Horace, Jeanne, Comtesse de Rudolstadt, Compagnon de Tour de France, Sept Cordes de Lyre* などの着想を得たこと、「自分はルルーの色あせた反映でしかない……」と書簡に書き残していることはよく知られている。サンドは九人もの子供をもつ大家族をかかえて生活苦にあえぐルルーを何度も援助している。ルルーが Nohant の近くの Boussac に印刷所を構えることができたのもサンドの友情によるものである。ここに協同体をつくり、ルルーの理論、人類教のユートピアを築くため、Jules Leroux⁹⁾、Ulysse Charpentier、Luc Desages、Grégoire Champseix などが集っていた。

ルルーは人間は感覚・感情・知識の三要素から成り立って、人によってそのうちの一要素が強く支配しているという三幅対理論をもっていて、これが彼の思考の中では自由・平等・友愛に結びついている。現在のように労働の用具が少数者の手にあって大部分のものが産業の奴隷であるとき、平等は成立しない。そこでアソシアシオンによる全体的なプランに従って労働を組織する。そしてその労働は三人の人、感覚、感情、知識のそれぞれの傾向を代表すると思われる三人にこの仕事場たる協同体がまかされる。ここでは皆が同一の報酬を受けとる。利潤があれば印刷所の発展と農地の開発用¹⁰⁾に使われる。それは産業プロレタリアと農業プロレタリアの連携が必要だからである。そして知的労働と肉体労働の区別は廃され、皆が両方の労働に携わる。

彼女は、Auguste Desmoulins¹¹⁾らと学校教育をまかされる。彼女の教育方法はまず生徒の興味をひくことを探し、生徒の天分を見出すこと。そのためソクラテス方式(対話によって相手から答えを産みださせる方式で産婆方式ともいう)を用いる。そして頻雑な事柄をフランス式単純におきかえること。ルフランセ宛書簡には「生徒を思いやりのある人間にすれば、あなたの教育は仕上がったといえましょう」とつけ加えている¹²⁾。

ルルーは政治を扱うことを好まず、*Revue Sociale* は教義の哲学的機関誌であったが、政治を扱う必要に迫られ、1847年5月には *l'Eclaireur, journal des départements du Centre, l'Indre, le Cher, l'Allier, le Puy-de-Dôme, la*

Haute-Vienne 紙が日刊の政治紙として発刊され、ルルーの教義をひろく流布することを意図した。1847年末にはルルーが責任者となり、N°6には *l'Eclair* は Luc Desages, Pauline Roland, Grégoire Champseix の三幅対によって編集されると書かれている。Luc Desages は sensation, Pauline Roland は sentiment, Grégoire Champseix を connaissance 代表することになっている。この新聞には P. Roland の署名の記事はない。サン＝シモン宗教のように、「ブサックの協同体の雰囲気は宗教的であった。モンシニ街やメニルモンタンで行われたように、日曜日には友愛と愛の教理が説かれた。小規模の理想社会を実現し、そこでは階級の反目はもはや存在しなかった、資本の力は消滅したかのようだった。

ポーリヌはしあわせだった。彼女は一日15～16時間働いた。友人に手紙を書くひまもないくらいだった……」¹³⁾

「しかしこの避難所も資本社会の圧力によって幻影、失敗に終る試みでしかなかった。農業開発も印刷業がうまくゆかない限り続かなかった。印刷業も危機に瀕していた。……ルルーとドザージュは本の予約注文をとり1848年1月パリに出かけた。」

§ 二月革命

二月革命が勃発した時、ルルーはこうした仕事のためにパリに滞在していたが、急いでブサックに戻り、ブサックの市長に会って臨時政府の共和国宣言に同意するよう要請したが、市長 Narbonne は辞職した。それに従って2月27日、新しい市長を選ぶ市町村選挙が行なわれた。ポーリヌ・ロランはオーギュスト・デムーランに伴われて、ルルーのために、ブサックの市役所へ男女平等の普通選挙権を要求しに出かけた。この権利は予測どおり拒否され、彼女は拒否に対する彼女の抗議が公的書類に書きとどめられるよう要求した。ルルーは市長に選ばれ、新しい市議会です速臨時政府に、「共和国万歳！ 我々は歓呼してこれを歓迎する。我々は熱烈に共和国宣言をした。パリの民衆は偉大で素晴らしい。三日で人類に新しい時代を開いたのだ。」という宣言文を送った。ポーリヌも欣喜雀躍したであろうことは想像にかたくないが、しばらくはブサックに留まっていたようだ。したがってパリの女性活動家たちに加わっていない。『女性の声』紙1848年3月20日号の雑報欄には、Marie-Antoinette Roland という婦人が、市町村選挙における女性の投票権を要求しにいったという記事があり、Pauline Roland となっていないことはおそらく昔のサン＝シモニアンで

あることに気がついていないのではないかと思われる¹⁴⁾。同紙29号にはポーリヌは Marie Pauline の名で *Que la femme doit travailler* という題で一文を寄稿している。しかし G. Lefrançais 宛のサン＝ラザール獄からの書簡 (1852. 5. 23) によると、「……私の以前の罪状は私の調書から消えました。この罪しか残っていません。1) 被告の家族のための慈善くじに参加したこと。2) 女性クラブに参加したこと。3) もっとも危険な社会主義プロパガンディストであること、これで全部です。」そして1) と3) に関しては自ら肯定するが、女性クラブに参加したことについては、「私はこう答えました。私はそうするには理性^{エスプリ}がありすぎます。まじめすぎます。」と書いて女性クラブを否定的に考えていたことがわかる。ポーリヌの言葉としては思いがけないが、ブサックというパリから遠い小都市で、苦しいながら理想的な協同体を実現している彼女にとっては、戯画化して伝えられる女性クラブの気狂い沙汰に冷たかったのであろう。またサンドの知己を得ているポーリヌは、彼女の影響をうけているのかも知れない。彼女の昔の仲間たちが『女性の声』紙で女性の権利を説いている時、彼女は *l'Eclaireur* 紙で Desages や Champseix と共に、ブルジョアや金持を国会に送らず、貧しい者、労働者、農民代表を送るための選挙活動をしていた。1848年6月事件のあと、ルルーは国会で孤軍奮闘して叛徒の弁護を行なったが、それも空しく、やがて法律の改悪が次々と行なわれ、新聞の保証金制度も復活して、*l'Eclaireur* 紙も1848年7月28日号で消えることになった。

ポーリヌはなおブサックに留まっているが、協同体の維持はむつかしくなる。「アソシアシオンの生活をしたあと、個人の生活に戻ることはむつかしく、おそらく昔のように独りで生活費を稼ぐことは不可能である。……」¹⁵⁾

ポーリヌにとってブサックの学校をやめなければならないのが最もつらい。彼女がブサックを去ったのは10月末以後である。*Peuple* 紙に送ったルルー宛の書簡の最後のものはブサック発10月18日付になっている。さて、*Lettre à Pierre Leroux sur l'association* という連載書簡が1848年11月27日、12月11日、12月18日、12月25日、1849年2月25～26日、3月5日、と *Peuple* 紙に載せられたが、この中にブサック協同体にふれた部分がある。ブサック協同体を神の市 (*cité de Dieu*) 建設になぞらえている。そして無智で無作法な住民と共に、荒蕪地に近い土地に、アソシアシオンの理想を築こうとしたと述べている。彼女は自分の教育についての考えをここで実践した。教育が彼女の人生の目的であった。しかし彼女はここでの教育は失敗であったと自認している。生徒を肉体的、精神的、知的能力を充分発達させて学校から送り出すことはでき

なかった。しかし周辺を眺めても、自分以上に成功をおさめているようにはみえない。その原因は教育が家庭と社会によって同時になされなくてはならないからだと考察する。彼女の実際の現場では、二十人ほどの生徒を三人の教育者が同じ信仰と愛と善の探求心をもって教育した。ルルーもしばしばこの教育を讃めてくれた。しかしあの大動乱（6月事件のことか）によって、我々の貧しい寺小屋は壊滅におちいったと述べている。反動を恐れて親が子供たちを引きあげたのであろうか。

そしてこうしたアソシアシオンの失敗は貧しさという外的原因もあるが、もっとも重要なのは相互理解、共通の信仰をもたなかったからとアソシアシオンの接着剤は宗教であることを述べる。ブサック協同体の信仰はルルーの理論 *Trinité* 三位一体論である。人間は感情、知識、感覚からなるもので、それに呼応する自由、平等、友愛を基礎とする信仰であり、愛と科学と活動の三位一体の神とか、かなり幼稚な数あわせをする。また人類の永遠性、各人の中にある人類という信仰、男女の完全な平等という信仰などルルーの人類教について語っているが、ポーリヌが理論を大上段にかまえて語るときはしばしば明晰さに欠け、ミステックといわざるを得ないし、説得的ではない。

1848年12月10日にラスパーユを大統領に推薦するためのパリ第二区の社会民主的宴会が催され、*Peuple* 紙に *Leroux, Hervé, Pegourié* と共にポーリヌの乾杯の演説も載っている。彼女の心情を素直に表現したものである。「両性の子供の平等で共通の教育のために乾杯！ 新しい宗教たる社会主義は家庭を、家族の基礎を、最も聖なる方法でつくることに努力しなければなりません。完全な平等が愛と結婚の本質そのものなのです。共通の教育がこの平等をつくるために必要です。

男女同一の教育によって、男性による女性の圧迫はやむでしょう。

男女同一の教育によって、不貞や甘いお世辞はなくなるでしょう。何故なら男性にとってあらゆる女性は姉妹になり、一人のみが妻、恋人になるはずですから。

同一教育によって、夫婦間の不平等は消えるでしょう。この不平等は女性が受ける肉体的、知的、精神的教育の劣等性故に、存在理由があったのです。

平等で共通の教育によって、家族の中に自由、平等、友愛の聖なる言葉が実現するでしょう。」

ここに彼女の男女平等論の特徴がよくみてとれる。『女性の声』紙が政治的市民的権利をまずなにより要求したのに対し、ポーリヌは現実の女性の劣等性

を認めた上で、教育の平等を実現すれば自から他の平等が獲得されると考えている。

§ 社会主義教師アソシアション

民主社会においての教育の重要性をルルーほど理解したものはなかった¹⁶⁾。ポーリヌの師たるルルーの教育論をここで要約して述べる必要がある。彼の教育論はもちろん人類教と彼の呼ぶドクトリンの一環をなす。ここに彼の人間的で柔軟な発想法が十全にみとれる。平等な公教育というのが基本的な柱である。すべてのものに事実上平等な教育を与える、しかし確認された能力によって内容は異なってくる。教育は公正な投票により、民衆の主権を行使するのに欠くことのできない条件で、教育のない人間は未成年者に等しい。現実はとりわけ子供の教育に携わる女性の教育の欠如が目につくし、また貧乏人の子供の教育がなおざりにされている。金持の子供が通う中学校に小学校の五十倍もの税金が使われているという事実がある。

どのような種類の教育を選ぶかの権利はふつう家父長にあると考えられているが、ルルーはこれは族長時代の遺物で、未来社会をつくる子供自身と社会にゆだねるべきだと主張する。

またモラルのない知識教育 (instruction) のみではむしろ有害であり、道徳教育 (éducation) の必要性を説く。彼のいう道徳教育とは何かといえ、人類の過去、未来、現在を視野に収めたシステムで、人間と人間との関係、人類と神の関係、個人と神の関係を含みいわば人類教を教えなくては教育 (éducation) とは言えないと説く。現在国家宗教というものが存在しないから、せめてジェズイットをも含めて宗教の平等な自由を容認するより仕方がないが、将来は学士院 (Institut) が一大哲学学院となり、行政、立法と同等の権力をもつ教育庁 (pouvoir éducatif) となるという構想を描く。

彼の考える国民教育組織は、彼の持論である三幅対原理に従う。あらゆる学問はそれを産んだ人間と同様三つの様態 (aspect) をもつ。それ故、その教育をするのも、感情、感覚、知識の三つの異なった視点から三人のものが教えなくてはならない。ブサックの日曜学校ではこの原理を適用して、同じテーマを三幅対 G. Champesix, A. Demoulins, L. Desages が扱っている。

ところでこの時代の教育制度の現実はどうのようなものであったかといえ、19世紀を通じて聖職者と非聖職者 (大学) とが教育の独占をめぐるなされた熾烈な闘争の歴史といえよう。王政復古、七月王政、二月革命、第二帝政、第

三共和制と政体が変わるにつれて、この力関係にも交替がおきていた。

七月王政時代には、Louis Philippe はこの闘争を *querelle des bedeaux et des cuistres* (寺男と学校の小使いの争い) と命名したが¹⁷⁾、革命によって王座についた彼はどちらかといえば教会側に不利な態度をとる。修道僧たちも免許証 (*brevet de capacité*) を得るために試験を受けなければならなくなると、その特権が廃された。また 1833 年 6 月 28 日に施行された「ギゾー法」(*loi Guizot*) はフランスにおける最初の初等教育憲章であった。1844年にヴェルサイユの初等師範学校を卒業して教師になった G. Lefrançais の『思い出』¹⁸⁾によると、ギゾーの名にもかかわらず、この法は1866年までに相次いで施行された他の法よりもリベラルであったと述べている。

G. Compayré は 1881 年にその『教育理論史』¹⁹⁾ の中で次のように書いている。ギゾー法は今日不十分に思えるかもしれないが、初等教育の実体を考えるならそれは必要な措置であったと述べ、教育の実状を明らかにしている。1837年の初等教育に関する調査によると、多くの市町村で市長自身が文盲であった。15乃至20の市町村に対して一校しかないことがしばしばあり、その上いくつかの地域では教師自身が読み書きができなかった。おそらくジャコト方式 (*Méthode Jacotot*) の「教師は自分の知らないことを教えることができる」を実践していたのか、それとも生徒を監督するだけであった。学校は保育園で教師は子供のお守り役である。生徒によって支払われる報酬はあまりに僅少なので、教師は貧困そのものか、いくつかの職を兼職せねばならなかった。教師は農夫であったり、靴屋、居酒屋を兼業していることもある。学校とキャバレーと家庭とが同じ場所で営まれさえする。これほど収入の少ない職は大抵は不具者など他の仕事ができないものがついていた。こういう状況での 1833 年法は画期的なものであった。

ギゾー法は地方自治体に対し、つぎの施設設置の義務を課した。各市町村に少なくとも小学校一校、各県庁所在地もしくは住民 6,000 人を越える各都市に高等小学校 (*école primaire supérieure*) 一校、各県に師範学校一校である。Compayré によれば、ギゾー法の最もよい点は高等小学校をつくり、小学校 (*école primaire*) と古典を教える中学 (*collège*) の中間的なものとし、初等基礎教育、幾何とその応用、とりわけ線画法、物理、博物学の基礎、唱歌、歴史や地理 (とりわけフランスの) を教えたことである。しかしこれは部分的にしか実行されず、1841年までに創設されたのは百六十一校である。しかし政府の無関心とラテン語教育を好む両親の虚栄心のためこの堅実な初等教育の試み

は十分な成果をあげなかった。

当時の公教育相 Salvandy は非常に進歩的な人物で、この他にもいろいろな改革を試みている。ギゾー法のおかげで多くの学校が全国に創設されたが、Duveau によれば²⁰⁾それでも七月王政の末頃でもまだ充分でなく、多くの少年はごく初歩の教育も受けられなかったし、ギゾー法は女子教育を等閑にしていた。ロット県の初等教育視学官によると1845年に三百八の市町村のうち、まだ小学校のないものが六十七ある。そして大部分の市町村に女子校はあるものの資格ある女教師は1/4にも達しないと述べている。教師の給与は極端に低かったことは前述のとおりだが、1847年23,000人の小学校教師のうち7,000人は年500フランに満たない給与であり、7,501人は400フラン以下、3,554人は300フランである。即ち一日17スウで、腕のよい女工が1フラン以上稼いでいたわけだから、その低い地位が理解できる。

Salvandy 公教育相は、二月革命前夜、次のような法案を提出していた。1) 1,500人以下の市町村で働く教師に600フラン、2) 小郡役所所在地で働く教師には900フラン、3) 郡及び県庁所在地で働く教師に1,200フラン。しかし二月革命のためこの議案は流産した。

二月革命後、H. Carnot が公教育相に任命され、彼と同じく元サン＝シモニアンの J. Reynaud と E. Charton に彼は協力を求めた。そして教育再編成計画をたてた。このプランは、教育の義務化、無償、自由（非宗教性）を宣言し、教師の道徳性証明書は廃され、公立学校教師は大臣が任命、国家によって給与が支払われる、給与は改善されるとうたっている。

しかしカルノは立法議会選挙前に、全国の教師に回状を送り、議員になるには財産も学歴も不要であり、良識と経験をもっていれば百姓の方がよいこともあると教えこむよう指示した。当然保守派の輦蹙を買い、保守派の優勢になった議会で彼は苦しい立場に追込まれる。教師の手当改善のため100万の特別予算要求をしたのに対し、議会は10万以下に削らせ、同時に修道女教師に10万以上の特別手当を追加させた。カルノは1848年7月5日辞任に追い込まれた。

1850年には De Parieu と De Falloux が後を継いで共和主義教師の迫害と教会権力を強化する法が制定された。1849年1月、ド・ファルーは二つの委員会（小学校及び中学校）により法案の検討に入った。この時期、1849年2月6日に二区の私立学校教師 Perot が *Peuple* 紙上に教師仲間のアソシエーション創設の呼びかけをした。Lefrançais によると²¹⁾、それは非聖職者教師たちの給与低下と宗教団体による教育機関の独占に対する抗議のための集会を意図して

いた。この会に30人ほどの教師が参加し、その中にドロワンとポーリヌ・ロランがいたことは前回述べた。ルフランセはそれ以前に友人によってポーリヌの家につれていかれたことがあったが、この会のあと二人は親しくなったらしく、ポーリヌはルフランセを我が子のように考えていたことが、ルフランセに宛てた三十通ほどの書簡に読みとることができる。また彼はポーリヌを次のように『思い出』の中で紹介している。「ピエール・ルルーの弟子、彼女はメニルモンタンのサン＝シモン協同体が消滅したあと彼の教義を受け入れた。ルルーもポーリヌも1832年にサン＝シモニアンであった。ロラン夫人はキリスト教的コミュニストである。」

「食っていく」には緊急に何かしなければならぬ、ジェズイットに食われてしまうとといった苦境、労働者と同じく貧困である上、ブルジョアの上辺をとりつくるわねばならぬ苦しみといった議論に数時間を費やし、この現状を打開する方策を模索しても、方法がないという結論に達し、皆が散会しようとした時、今まで黙っていたポーリヌが発言を求めた。

「私たちは市民ペロのおかげで集まることができたのだから、この機会を利用して私たちの教育があるべき姿になっているか検討してみたらどうでしょう。より公正で、自由で、より尊厳がもて、平等である社会状態をみなさんは希求していられます。おそらくこれは私たち自身のためにも尊厳と独立と幸福を獲得する本当の実際的手段ではないでしょうか。私たちはそうしたものへの権利を皆もっていますし、こうした社会を改革をしない限り、永遠にその権利は取りあげられてしまいます。」それで討論は再開したが、大部分のものは共和主義者でジェズイット嫌いではあったが、社会主義もまた気狂沙汰と考えていたのであった。結局 Perot, Pauline, J. Deroin, G. Lefrançais, Bizet 夫妻（「カルメン」の作者で音楽教師）などがポーリヌの提案に賛成し、一週に三回集って社会主義教師アソシエーションの基礎づくりの議論をすることになった。rue Clichy の近くの rue de Douai にポーリヌが留守中の友人に借りている大きなアパートでこの会合は行なわれた。ポーリヌとドロワンは神の存在を強く信じているし、ビゼー夫妻はプルドン風カトリック、その友 Depau はヴォルテール流理神論者、ルフランセとペロは無神論者で、それぞれの立場が異なる寄合世帯なので烈しい論戦となり、友好的な会合にはならなかったが、時々ポーリヌの家で例会外の夕食会を開いた。彼らはそこでポーリヌの旧友たちに出会って、その高い学識に大いに助けられた。医者でもあり、*Revue Indépendante* を編集していた Ferdinand François, *Philosophie du Socialisme* を著した博

学なナントの医者 Guépin, クルーズ県の代議士で Pierre Leroux の弟 Jules Leroux, プルードンの協力者で, *Représentant du Peuple* 紙以来の編集者 Jules Viard, 年金生活者で Mably の社会理論をまとめようとしている Rochery, コミュニストの Pecqueur, 労働者詩人 Pierre Dupont とその妻などである。夕食は持ちあわせのあるものが出して、貧しいながら楽しい会になる。クリシィの市門の近くなので門外でワインを買い、市税を大目にみてもらう便宜もあった。こうして教育プログラムが出来上った。無神論者のルフランセはポーリヌらの神の信仰宣言に仕方なく折り合うことにした。彼はこれをコンドルセ以来始めて子供のあらゆる能力を調和させて発達させる目的でつくられた教育プログラムであると自負している。

ここで、現代でも興味深いこのプログラムを紹介しよう。

まずポーリヌ, ルフランセ, ペロがこのアソシアシオンの執行委員となって1849年9月30日に *Appel aux Instituteurs* という呼びかけを行なっている。これにはポーリヌの強い影響がみてとれる。

教師諸君へ²²⁾

市民にして兄弟よ、

二月革命の大義は精神的且物質的である。民衆はルイ・フィリップとその腐敗した一味によって甚しく侵された道徳のために立ちあがり、君主制は遁走した。革命の物質的面は否定できない明白な事実であり、二年後の今日、長年我々を搾取していた体制への抗議があらゆる方面から上っている。社会運動のこの第二の部分、労働者アソシアシオンはその完成に向かって歩んでいる。旧世界の人々がしかけるあらゆる種類の嫌がらせにもかかわらず、これらのアソシアシオンは、やがて知性と労働が同じ友愛の感情の中に結合された成果をみせてくれるであろう。しかしこの産業的改革の一方で同様に重要な改革、精神的改革がある。これは教育によってしか完成しえないものである。教育のみが新しい世代をエゴイズムに侵されぬようしうるのである。君主制は我々をより確実に支配しうるようにエゴイズムで我々皆の心を多少とも墮落させてきたのである。

何人かの教師が学問以上に献身の心をもって行動を開始せねばならぬと考え、その意志を協同させた。そのプログラムは簡単で、数語で要約することができる。初等学校 (*école primaire*) と中等学校 (*école secondaire*) という学校分割は共和国が廃すべきカスト差別を温存させているものである

が、今はこれを一応問題にはせず、ただ平等の教育をすべての人々に与えるということのみを確認する。皆に自由、平等、友愛の三つの言葉の発展たる道徳教育をほどこすべきである。以上がこの目的である。方法に関しては人類の未来に対する信仰が彼らに力と善意を与える。知性に関してはこれほどまでの大事業に対して、我々の知性は充分とはいえないかもしれないが、我々は同胞の中にそれを補える人を見出せることを疑わない。

社会主義教師アソシアシオンは、自らに与えた任務を始める前に、皆さんにその存在と目的をお知らせしなければ、あなた方に対する友愛に悖ると考えた。我々は皆さんの中に多くの共鳴者と支持を見出しうると考える。

教師は今まであまりに革命の外にいた。あるいは無関心から、あるいは迫害を恐れてであるが。いわば反動に手を借したのは後者の理由によると我々は考える。友愛的に団結し、連帯する代りに彼らは互に孤立し、狭い個人的利害の枠の中にとじこもっている。その結果何が起きたか。彼らを指導者と期待し、彼らが民衆の大義に無関心でないと信じていた民衆は彼らから離れ、見捨てた。王党派はこの誤ちを利用し、市町村の中での彼らの影響をより少なくするために、あらゆる方法で彼らを侮辱した。数日前にも臨時政府の元メンバーの一人が（原注、ラマルチーヌの *Conseiller du Peuple* の1849年9月号）その筆で市町村学校教師を汚そうと試み、大量首切りを要求した。これほどの人物からのもしそう言えるなら侮辱を、我々の仲間の一人が直ちに取りあげたので、我々は深入りしないでおこう。

我々はこのような状態は終りにしなければならぬ時と考える。そして無気力状態から目ざめて、我々がまず第一に立てるべきであった社会主義の旗を我々自身で持ちたいと民衆に要請しにゆくべき時である。我々は教育が真の司祭職となり、教育者が新世界の司祭となって、現在のようなカトリック司祭にとって代り、真理の道へ人を導く仕事を課せられるだろうと考えた。民主的社会的共和国の旗印のもとに我ら皆が団結しない限りこの目的に達し得ないであろうから、社会主義教師アソシアシオンは単に托された子供たちに民主教育を与えるのみならず、正義と平等を勝利させるために、このアソシアシオンに参加するものたち全員の間の密なる連帯を確立したいと思うのである。

それ故に民衆の子であるあなた方へ、あなた方の善意と民衆への愛を確信して我々はあなた方に提案するのである。

兄弟よ、我々もまた革命を成就させるべきである。我々もまた民衆が二月

に土台を築いた大殿堂に石材を運ばねばならない。かくも立派な仕事のために団結しようではないか、そして打ち破らねばならぬであろう障害を恐れてはならない。無智や悪意がきつと手をたづさえて我々に立ち向かうであろう。無智の蒙を開けば、やがて悪意の方も消え去るであろう。権力の迫害や貧困、生活苦がおそらく我々を待ちうけているだろう。しかしそんなことは何でもない。新しい時代が開け、民衆は我々がそこに入って導くよう待っているのだ。将来民衆に卑怯な裏切り者と責められぬようにしようではないか。兄弟よ、我々に力をお借し頂きたい。そうすれば我々は立ちはだかるこの無智とエゴイズムと腐敗の世界をより容易に打ち破ることができよう。我々の孤立のみがこの旧世界に力を与えている。もし我々が共に手をたづさえて戦えば、旧世界は抵抗することはできないであろう。そして我々はやがて友愛の寺院の中に入ることができるであろう。

我々のアピールに答えられんことを。

臨時執行委員会

G・ルフランセ、ポーリヌ・ロラン、ペロ

聖職者に任命・罷免権を握られていて、大部分の教師が無気力に、ただ権力の趨勢をうかがっている状況がわかる。ポーリヌが教職を聖職として墮落したカトリック司祭にとって代ろうとしていることは、前回述べたドロワンやニボワイエなどの活動家に共通するところである。

次にこのアソシアシオンの教育プログラムの「原理宣言」はピエール・ルルーの人類教そのものと言えるほどで、ポーリヌが如何にルルーに私淑していたかがみてとれる。

そこには人類の一体性、人間の連帯と友愛、男女の平等、人間同士の平等、人類の果てしない進歩と完成可能性、すべての人の自由で友愛的且平等なアソシアシオンの必要性、民衆の主権、家族制度の尊重、特権の廃止、あらゆる個人の教育の権利とその全能力を発達させる権利、労働への権利を信条として列挙してある、その目的は自由、平等、友愛を生活の規則とすることのみである。

それにつづくプログラムは七章に分かれる。1章は緒論、2章から誕生から成人までを6期に分けて、三年ずつを一期として各論を精説している。

緒論では、プラトン、聖アウグスチヌス、ルソー、93年の山嶽派などいつの時代も偉大なる「宗教的な心」をもつ人々は教育制度を考えてきた。新しい教

義はそれ自身に新しい宗教を含んでおり、新しい宗教はモラルを、あらゆるモラルは一つの文明を含んでいる。そして新しい文明はこれに完全にマッチする教育制度を必要とする。古代社会では特権階級にのみ教育は存在した。ギリシャ・ローマ共和国では市民にのみ肉体と知性の教育がなされ、一方感情教育はなおざりにされた。そして奴隷には教育は与えられなかった。キリスト教の影響のもとでは、パガニズムへの反動から二元論に教育の基礎をおき、物質を蔑視した。肉体を無視して知性と感情のみに重点をおく教育をした。同様に肉体的職業、手仕事にたずさわる人を教育から遠ざけた。しかし今日産業は芸術や科学と同様に聖なるもので、リベラルな職業と隷従的（肉体的）職業とに分けるべきでない。すべての人がそれぞれの適性にあう教育をうける権利がある。すべての人が肉体的、精神的、知的能力を最大限に調和的に発達させなくてはならない。

教育は個人の完全な発達のために家庭と学校の両方でなされねばならない。それ故個人教育や寄宿舎には批判的である。

未来の教育は、身体の発達（これには五官の発達も含む）、心情（感情）教育（精神的、芸術的発達）、及び知的教育といった人間学のあらゆる領域を各人の能力に従って行なう。現在の教育はあるいは百科辞典的にするか、あるいは専門人化するという批判を行なっている。そうではなくて、教育は各人の人間としてのある種の全体性を発達させ、同時に一つ乃至いくつかの芸術的または学問的職業を果たせるようにしなければならない。こうして手仕事と知的職業との差別をなくそうとしているのである。

現代の教育のもう一つの批判点は、ブルジョアとプロレタリアの二つの階級に教育が分かれてしまっている点である。貧者には能力に関係なく初等教育（*école primaire*）のみ、金持は細分化された上級教育（*collège*）によって適性を欠いた職におしやられ、半学者が生産されている。

社会主義教育は家族の地位に関係なく、平等にもとづき、子供の適性に従って教育する。人間に育て上げ、その知性を全的に開花させて、適性のある仕事ができるようにする。

第一期の^{クレツシュ}保育園

誕生から三歳までの教育で、保育園はこれまで貧しい母親の救済所と考えられていた。家庭の擁護者と自称する人はこれに反対してきたが、実際にはいつも子供は両親と離れている。プチブル家庭は乳幼児を見知らぬ乳母に預けるし、

上流階級は母親のエゴイズムと、度し難い有閑好みのために召使いにこの聖なる義務をおしつけている。母親が子供を育てることは女性の神聖な義務であるが、それだけが唯一の義務ではない。保育園は女性を解放すると同時に家族の絆を強める。何故なら母親は保育園で子供を見守ることもできるし、また保育園は八時間で家庭に帰させるからである。保育園は衛生がきびしく守られ、温度、通気、衣服によく注意が払われねばならない。この時期の教育は、子供の意志をよくつかみ、それを抑えることなく、自由に発展させ、人格形成をする。この時期はとりわけ五官の発達に重点がおかれ、すべてが遊びでなくてはならない、しかし規則性をもたせなければならない。

第二期は三歳から六歳の幼稚園期

体育に重点をおくことは前期と同じで、筋力や器用さを発達させる。この時期からデッサン、歌唱、楽器、書き方、朗唱(記憶力発達のため)が教えられ、外国語も第一期から引続き教えられる。読書は五、六歳頃から始められる。音楽理論はまだ教えない。知識教育はまだ重点をおかない。子供の想像力、その精神の感情的部分のみを肉体と共に発達させる。

第三期 六歳から九歳

前期の教育を続けながら、さらに水泳、馬術、ダンス、農業や技術的ないくらかの作業が加えられる。道徳教育は感情的形態をとる。即ち「お互に愛し相いなさい」と「自分のされたくないことを他人にしてはならない」という教えだけである。知識教育はこの時期から始まるが、暗記させるより、学びたいという欲望を起こさせるための教育である。歴史物語、自然地理、数学では加・減・乗算を始め、動詞の活用と文法の初歩を教える。

女子も男子と同じ教育を受ける。「我々は女性も男性も自由で理性的な人間、他人に従属するのでなく、労働と愛と思想と性格とにより独立しているように育てられることを望む。男性の宿命的な附属物として育てたくない。」

第四期 九歳から十二歳

この時期は現在の公的教育と社会主義教育との差違がはっきりである。現在貧しい子供は手工業に役立ついくらかの初歩的技術と科学のみ教えられ、金持の子供はコレージュ (collège) で役に立たない教育のみを受ける。「人文科学」(humanités) という名のもとにギリシャ・ラテン語とスコラ哲学が教えられる。肉体と心情を犠牲にして、知性のみを発達させようとする。プチブルの子供は専科学校 (école spéciale) という中間的学校でひたすら商人や技師のみを養成し、人間をつくらない。これに対し、社会主義教育は相変わらず身体、心

情、知性とを同時に発達させる。暗記よりも推理能力を発達させる。体育は続けるが前より時間は減らす。知識教育は本格的になって、音楽、絵画も理論を教え、文法の初歩、歴史、地理、化学、鉱物学などが教えられ、これらの教育はすべて宗教精神、哲学によってつながれる。

第五期 十二歳から十五歳

1/3 の時間を農場や産業作業場で過ごす実技が加わる。知識教育は文法、能力のあるものには古典語、文学、歴史、地理、数学、天文学等。芸術教育はすべての人がある程度形や音で自分の考えを表現できるようにする。

ここで職業的オリエンテーションが始まる。教師も両親も子供の適性を産業、学問、芸術と複数の道において見出すよう努力する。

第六期 十五歳から十八歳

この時期に彼らの適職 (fonction) を見つけ、〈fonctionnaire〉即ち社会に有用な仕事に完全に適した人間にする。

このプログラムはパリの民主的社会主義新聞に送られ、多くの反応があった。行動センターができて情報が得られると感謝する手紙や、支部をブルターニュにつくりたいという女性教師もある。ロンドンに亡命中のルイ・ブランやミッシェル・ド・ブルジュ、ナドーなどからも精神的支持が送られる。オーギュスト・デムーランやデルブルックをはじめ教師アソシアシオンのメンバーになった教師も多かった。

弁護士と相談して、法的追求を受けないよう商業的性格（社会的出資、利益配分）を与え、警視庁へその定款を提出した。

前稿で述べたドロワンが中心になってつくられた友愛アソシアシオン連合結成時には勿論参加している。

1850年1月、Jules Leroux, P. Rochery, L. Nettré によって再刊された *Revue Sociale* に「社会主義教師家族の夕食会」と題して社会主義教師友愛アソシアシオン創立記念宴会がアマンディエ柵近くの料理屋で開かれた記事がある。Malardier の「教育による民衆解放のため」の乾杯、ポーリヌと考えられる一女教師の「社会主義のために！ 宗教のために！ 教育のために！」という演説の全文が収録されている。他にも二人の教師の乾杯の辞があり、最後はピエール・デュポンの歌でこの会はしめくくられたと述べている。この他に機関紙 *Education Socialiste* 発刊の広告があり、また労働者アソシアシオンなどに向けて有料または無料の講義や授業を行なうことを知らせている。

しかし前述の如く、ド・フェルー法は市町村の公立学校の教師を市長と司祭に従属させ、一方宗教団体の学校は精神的監督のみを受けるという聖職者側に顔を向けた法を定めた。この法律は議会でのルルーの鋭い反対演説にもかかわらず、Thiers や Montalambert の強力な支持を受け、非聖職者教師の圧迫に拍車をかけた。

ドロワンたちと結成したアソシアシオン連合の集会がミッシェル・ル・コント秘密結社事件として集会者たちが逮捕された時、ポーリヌはその場になかった。しかしその後逮捕され、家宅搜索をうけた。彼女が投獄されている間も社会主義教師アソシアシオンは細々ながら存続しているようだが、内部での軋轢もあり、ポーリヌの思う方向に進んでいない様子がルフランセ宛書簡で散見される。

(つづく)

[注]

- 1) Ribeyrolles (Ch.) *Les bagnes d'Afrique, histoire de la transportation de de décembre* Londres, Jeffs. 1853.
- 2) M. Thibert. op. cit. p. 483. note(1). しかし、シャルレッティの注に引用されたデシュタルのリストはやや異なった分類をしていて、コレージュが第一階級でその下に第二、第三階級があるようだ。
- 3) Vinçard ainé: *Mémoire épisodique d'un vieux chansonnier saint-simonien* p. 104—106.
- 4) N°9. N°24. Double Méprise, N°26 un mot sur Byron, N°28 Ahasverus de Quinet.
- 5) M. Thibert. op. cit. p. 487.
- 6) E. Thomas. op. cit. p. 60.
- 7) M. Thibert. op. cit. p. 497.
- 8) Jehan d'Ivray: *L'aventure saint-simonienne et les femmes.* p. 180—181. より引用。
- 9) Jules Leroux は Pierre Leroux の弟で同様に印刷工で代議士になった。Ulysse Charpentier はポワチエの弁護士であるが、*l'Eclaireur* が発行された時ブサックにいた。ルルーの共同体に参加するために印刷工にもなった。Luc Desages (1820—1903) はルルーの女婿、Charpentier の仲間でルルーの新聞 *Revue Sociale* にも執筆している。Gregoire Champesaix (1817—1864) は *Revue Sociale, Vraie République* に執筆、*Peuple* の主筆にもなった。クーデターの後ローザンヌに逃れ中学で教鞭をとった。妻は後に André Léo のペンネームをもつフェミニストである。
- 10) E. Thomas. op. cit. p. 98. 次注の A. Desmoulins は1850年の *Revue Sociale* で Boussac 協同体の歴史を連載し、P. ルルーの甥の Henry Achille Leroux が農業が好きで父と共に農場の開拓に励んだ様子が書かれている。この農場は印刷所の収益を提供して買ったもので、ルルーの *Circulus* の理論を実践していた。
- 11) Auguste Desmoulins (1823—1891) はルルーの女婿、印刷工。Luc Desages と

共にルルーの農業コロニーや印刷所で働く。クーデターの後にはルルーと共にジャージー島に亡命し、更にアメリカにも渡っている。

- 12) Lettre de Pauline St Lazares. 14 mai. 1851.
- 13) E. Thomas. op. cit. p. 101.
- 14) M. Thibert. op. cit. p. 530, note 及び *Voix des Femmes*. N°1.
- 15) E. Thomas. op. cit. p. 112.
- 16) Felix Thomas: Pierre Leroux. p. 296—303.
- 17) Georges Duveau: *La Pensée ouvrière sur l'éducation*. p. 27.
- 18) Gustave Lefrançais: *Souvenirs d'un révolutionnaire*. p. 32.
- 19) Gabriel Compayré: *Histoire critique des doctrines de l'éducation en France* T2. p. 338—344.
- 20) G. Duveau. op. cit. p. 29. 以下.
- 21) G. Lefrançais. op. cit. p. 84.
- 22) G. Lefrançais. op. cit. appendice.